

## 内集団・外集団カテゴリー化とあいまいさへの耐性が 異質な新参者への受容反応に及ぼす効果<sup>1) 2)</sup>

植 村 善 太 郎<sup>3)</sup>

### 問 題

現在の社会では、「個性尊重」、「価値の多様化」が様々な方面で説かれている。個性を尊重し、多様な価値を受け入れることは、社会には重要なことであろう。その目標のもとでは、我々は従来の横並び集団主義的な傾向を抑え、身近なところにも異質な個性を受容することが必要である。

一方で、人は一般的に、非類似で異質な他者を回避する。例えば、Heider (1958) は、人は非類似なものを嫌う傾向があると述べている。また、認知的不協和理論の観点からも自己の意見と不一致な他者は、不協和を生じさせるとされる (Festinger, 1957)。先にあげた社会的目標を実現するためには、このような異質性への回避傾向を緩和する必要がある。

異質性に対する受容反応を促進する要因について、社会的アイデンティティ理論 (social identity theory) は有益な示唆を与えてくれる。社会的アイデンティティ理論では、内集団 (自己の所属集団) と外集団 (非所属集団) の区別 (カテゴリー化) が生じただけで、報酬分配の際に内集団をひいきすることが示されている (Billig & Tajfel, 1973)。しかも、この際の集団には、現実的な相互作用や、成員間での共通性は必要なく、純粹に認知的カテゴリー化が生じれば、内集団びいきは起るとされる。カテゴリー化によって集団間の差別が起きるとすれば、カテゴリー化を変化させることで集

団間差別を低減できる可能性が導かれる。

実際、Gaertner et al. (1989) は以下のような研究によってカテゴリー化の変化が、個人間の魅力に影響することを検証している。その研究では、被験者は2つの3人集団に分けられたのちに、1つの6人集団にされるか、2つの集団のままか、6人の個人に分けられて作業を行なった。6人集団になったものはかつての外集団成員への好意を増加させ、6人の個人となったものはかつての内集団成員への好意を減少させた。集団の再構成により、内集団の再カテゴリー化が生じ、個人への魅力が変わったのである。この研究は、同じ対象に対しても内集団成員か、外集団成員かというカテゴリー化が変化することで、魅力も変化することを示している。

この考えは本研究にも用いることが出来るであろう。すなわち、異質な他者も内集団成員としてカテゴリー化されれば、受容される可能性が高まると考えられる。そこで本研究では、カテゴリー化の操作が、異質な他者の受容に及ぼす影響を検討する。具体的には、所属集団に新規に人が参入してくる状況 (受容状況) と、その新参者が異質で葛藤状態におちいる状況 (葛藤後状況) の2状況を設定する。その新参者は大きい集団カテゴリー (教示文の中では所属大学) では自己と共通の成員であるが、小さい集団カテゴリー (教示文の中では大学内でのクラブ・サークルなど) では外集団成員である。そのような個人を集団に受け入れる際のカテゴリー化を質問紙の教示文によって4条件 (小集団カテゴリー化条件、再カテゴリー化条件、大集団カテゴリー化条件、カテゴリー化なし条件) 設定する。

小集団カテゴリー化条件は新参者との共通の大集団カテゴリーに注意が向かず、所属小集団と新参者との境界線が3条件中最も明瞭な条件である。

再カテゴリー化条件は、Gaertner et al. (1989) での6人集団に統合された群に対応する条件である。最初は小集団でカテゴリー化が生じるが、後で大集団に基づくカテゴリー化が生じる。この条件は、一度生じたカテゴリー化が変化することで受容反応が高まることを確

1) 本論文の作成にあたり、御指導、御助言をいただきました名古屋大学教育学部 吉田俊和教授に心より感謝申し上げます。

2) 本研究は、筆者が名古屋大学教育学研究科に提出した修士論文 (1997年度) の一部に加筆・修正を加えたものである。また、本研究の一部は、1998年の日本グループ・ダイナミックス学会 第46回大会にて発表されている。

3) 名古屋大学大学院教育学研究科

認るための条件である。ただし、この条件における、小集団カテゴリー化の生起を直接調べる測度はない。小集団カテゴリー化条件で、条件操作が有効であれば、この条件でも有効であったとみなすことにする。

大集団カテゴリー化条件は大集団に基づくカテゴリー化を活性化させることが、受容反応を高めることを確かめる条件である。

カテゴリー化なし条件は、操作を加えない場合の受容反応を調べる条件である。

また、異質性の受容に関しては、あいまいさへの耐性 (Budner, 1962 ; 今川, 1981) の高い人がより受容的であることが分かっている (植村, 1997a)。あいまいさへの耐性は、あいまいな状況に耐えられる程度を示す個人差である。あいまいな状況に耐えられない人は、異質な他者と共にいることでの予測不能性や、認知世界が動揺させられることを嫌うため、異質性を拒絶すると考えられる。あいまいさへの耐性と類似した概念である認知的閉鎖欲求 (Webster & Kruglanski, 1994) を使用した研究 (浦, 1997) でも、閉鎖欲求が高い人は逸脱者の受容に、より高い抵抗を示しており、異質性の受容には個人差も存在することが示されている。そこで、本研究でも、植村 (1997a) で使用されたあいまいさへの耐性尺度を用いて、個人差変数の効果も検討する。

結果は以下のように予測できる。受容状況では、新参者の異質性はまだ明確ではない。したがって、小集団カテゴリー化条件ではカテゴリー化の効果が小さくなる分、個人差が効果を持ち、あいまいさへの耐性が高い人は低い人よりも受容反応が高いだろう。再カテゴリー化、大集団カテゴリー化条件では、新参者を内集団成員とみなすので個人差は小さく、受容反応は小集団カテゴリー化、カテゴリー化なし条件より高いだろう。カテゴリー化なし条件では、カテゴリー化が不明確な分、個人差の効果が大きく、あいまいさへの耐性が高い人の方が低い人よりも受容反応が高いだろう。まとめると、受容状況では、再カテゴリー化条件、大集団カテゴリー化条件では受容反応はほぼ等しく他の2条件よりも高くなり、小集団カテゴリー化、カテゴリー化なし条件ではあいまいさへの耐性が高い人は低い人よりも受容反応が高いであろう (仮説1)。

葛藤後状況では葛藤が生じたため、小集団カテゴリー化条件では、新参者の外集団成員性が顕現化し、新参者への拒絶が高く、個人差はあらわれまいだろう。再カテゴリー化、大集団カテゴリー化条件では、新参者と自己は同じカテゴリーに属しており、受容反応は小集団カテゴリー化条件より高く、個人差による受容反応の差異も小さいだろう。カテゴリー化なし条件ではカテゴリー化

が不明瞭なので、個人差が受容反応に影響すると考えられるので、あいまいさへの耐性が低い人は高い人に比べて拒否的だろう。まとめると、小集団カテゴリー化条件では受容反応は他の3群より低く、カテゴリー化なし条件ではあいまいさへの耐性が高い人は低い人に比べて受容反応が高く、再カテゴリー化、大集団カテゴリー化条件では全体として小集団カテゴリー化より受容反応が高く個人差による差も生じまいだろう (仮説2)。以上の仮説を持って調査を行なった。

## 方法

### 被験者

愛知県内の大学生、短大生256名 (男性140, 女性115, 不明1名)。

### 調査方法

教示文による場面想定法を使用する。質問紙の項目と教示文の一部を変えることで、小集団カテゴリー化条件、再カテゴリー化条件 (小集団カテゴリー化の後、大集団カテゴリー化)、大集団カテゴリー化条件、カテゴリー化なし条件の4条件を設定する。質問紙の中で、小集団は被験者自身が所属している大学内集団 (サークル、クラブなど) として、大集団は所属大学として表現されている。

### 所属小集団の特定

被験者が大学内で、サークルやクラブなどの集団に所属している場合はその集団の、していない場合は、ゼミや友達集団の集団名のイニシャルを記入してもらう<sup>4)</sup>。ここで回答された集団を以後の教示文での想定集団とする。

**条件操作手続き 所属集団に関する質問** 集団に関する簡単な質問に答えてもらうことで、その集団を意識化し、カテゴリー化を促進することを意図する。小集団カテゴリー化条件では、小集団カテゴリー活性化を意図した質問6項目 (項目例: そのグループと他のグループで違うと思うところはどんなところですか) に答えてもらう。大集団カテゴリー化条件では、大集団カテゴリー活性化を意図した質問6項目 (項目例: この大学の学生に共通する特徴にはどんなことがあると思いますか) に答えてもらう。再カテゴリー化条件ではこれらの両方に答えてもらう。カテゴリー化なし条件ではこの部分はない。

**場面教示文** 教示文による場面想定を行ない、その場面の中で条件ごとにカテゴリー化を活性化する。物語の

4) 友達集団の場合、集団名はないのが普通であるが、ここでは便宜的に名前をつけてもらい、その頭文字を記述してもらった。

大筋は、質問紙の最初に答えてもらった集団でアルバイトに行くと、初対面の同じ大学に通う学生が作業集団に加わってくるというものである。

小集団カテゴリー化条件では、もとの集団に人数の調整上、メンバー全員にとって初対面で、同じ大学に通う人が一人加わると教示される。また、集団名を登録することになるが、この条件では、もとの集団名（アンケートの最初に答えてもらった集団の名前）で登録する。

再カテゴリー化条件では、一旦もとの集団がそのまま作業集団になって働くことになり、集団名も同じまま登録される。その後、人数の調整上、集団を各大学単位に再編成することになる。被験者の作業集団には、同じ大学の人で、初対面の人一人含まれることになる。この集団の名前は、大学の名前で再登録される。

大集団カテゴリー化条件では、集団は所属大学をもとに分けられる。それにともない、同じ大学の人で、もとの集団に属さない初対面の人1名が、作業集団に加わる。この集団の名前は、大学の名前で登録される。

カテゴリー化なし条件では、集団はそのままのメンバーで働くことになる。ところが人数の調整上、大学は同じだが、もとのメンバー全員にとって初対面の人1人集団に加わる。

#### 操作チェック

以上の手続きの後、カテゴリー化の操作が、有効に機能しているかをチェックするため、被験者に、作業集団の構成の認知を尋ねた。作業集団の構成は、1) 共通項のない個人の集まり、2) 自分のもとの集団に初対面の人加わった集まり、3) 同じ大学に通う学生の集まりのうちどれだと思うかを1つ選択してもらった。

操作が有効なら、小集団カテゴリー化条件では2が回答され、再カテゴリー化条件と大集団カテゴリー化条件とでは3が回答される。カテゴリー化なし条件ではほぼランダムな回答になると考えられる。

#### 個人変数測定

植村(1997a)で使用された、10項目の短縮版あいま

いさへの耐性尺度を用いた(項目例: 今日1日の予定を知ることは、大事なことです)。

#### 2 状況の受容反応測定

植村(1997b)で作成された寛容さ尺度のうち、本研究の目的に合致する受容状況と葛藤後状況の尺度から適切と思われる項目を選択し、本研究の4条件に合わせた教示文をつけて受容反応の測定とした(Table 2, 3参照)。

受容状況での教示文は、カテゴリー化のための教示文を要約して示し、そのような場面で新しく人が入ってきた際の反応を尋ねている。

葛藤後状況での教示文では、新参者と仕事の取り組み方の違い(協調的か個人主義的か)がもとで、口論になったあとの反応を質問している。

本研究においては受容状況とは、初対面の新参者が入ってきた状況で、その人のひととなりは不明である。一方、葛藤後状況は、新参者が集団から逸脱していることが明らかとなり、それがもとで現実的葛藤が生じてしまった後という状況である。

## 結 果

### 条件操作の確認

実験条件操作の有効性を確認するために、カテゴリー化条件と操作チェックのカテゴリーとをかけあわせた4(実験条件)×3(操作チェックカテゴリー)のクロス集計(Table 1)を行ない、 $\chi^2$ 検定を行なった。

$\chi^2$ 検定の結果、有意な偏りは見いだされず、条件分けの操作は失敗に終わっていた( $\chi^2_{(6)} = 5.23, ns$ )。本調査での教示文によるカテゴリー化の操作は無効であった。この結果、カテゴリー化の操作が受容反応に変化を与えるという仮説は検討できなくなった。そこで以後は、操作チェックに使用した、集団構成の認知(個人カテゴリー化認知、小集団カテゴリー化認知、大集団カテゴリー化認知)を使用しての分析を行なう。

Table 1より集団構成の認知において、個人カテ

Table 1 4 (カテゴリー化操作条件)×3 (操作チェックカテゴリー) のクロス集計表

	操作チェックカテゴリー			計
	個人の集まり	もとのグループに 初対面の人 加わった集まり	同じ大学に通う 学生の集まり	
小集団カテゴリー化条件	10	21	28	59
再カテゴリー化条件	9	20	34	63
大集団カテゴリー化条件	12	29	23	64
カテゴリー化なし条件	9	29	28	66
計	40	99	113	252

リー化認知群は40名、小集団カテゴリー化認知群は99名、大集団カテゴリー化認知群は113名である。もう1つの独立変数であるあいまいさへの耐性ととの独立性の検討のため3（集団構成の認知3群）×2（あいまいさへの耐性高・低群）の $\chi^2$ 検定を行なったが、有意な関連はみられなかった（ $\chi^2_{(2)} = .76, ns$ ）。そこで、集団構成の認知とあいまいさへの耐性を独立変数とした分析作業は可能と判断した。

#### 集団構成の認知とあいまいさへの耐性を独立変数とした分析の目的と仮説

条件操作の失敗により、カテゴリー化操作の受容反応への効果は検討できなくなった。以後の目的は、認知された集団構成およびあいまいさへの耐性と、異質性への受容反応との関連を検討することである。

受容状況では、個人カテゴリー化認知群は、カテゴリー化の影響を受けないことから個人差が効果を持ち、あいまいさへの耐性が高い人は低い人よりも受容反応が高いだろう。小集団カテゴリー化認知群では、新参者の異質性がまだ不明確なので、個人変数が効果を持ち、あいまいさへの耐性が高い人は低い人より受容反応が高いだろう。大集団カテゴリー化認知群では、新参者は内集団成員とみなされ、受容反応は個人差に影響を受けず、前者の2群より高いと考えられる。まとめると、個人カテゴリー化認知群、小集団カテゴリー化認知群ではあいまいさへの耐性が高い人は低い人に比べて受容反応は高く、大集団カテゴリー化認知群は個人差に影響されず全体として前の2群よりも受容反応は高いだろう（仮説①）。

葛藤後状況では、個人カテゴリー化認知群ではカテゴ

リー化の影響が生じない分、個人差の効果が大きく、あいまいさへの耐性が高い人は、低い人よりも受容反応が高いだろう。小集団カテゴリー化認知群では、葛藤により新参者の外集団成員性が明確になる結果、個人差なく受容反応は低いだろう。大集団カテゴリー化認知群では、新参者が異質であったとしても内集団成員とみなされることから、受容反応は高いであろう。まとめると、個人カテゴリー化認知群では、あいまいさへの耐性が高い人は低い人に比べて受容反応が高く、小集団カテゴリー化認知群より大集団カテゴリー化認知群は、受容反応が高く、後者の2群では個人差は小さいであろう（仮説②）。これらの仮説を以下で検討する。

#### 尺度の検討

あいまいさへの耐性尺度の信頼性係数（ $\alpha$ 係数）は、.72で十分と判断した。次に、受容反応の測度を、受容状況と葛藤後状況で別々に主成分分析（バリマックス回転）を行なった。

まず受容状況の受容反応尺度からは、固有値の減衰状況や、項目のまとまりの良さから2主成分を抽出した（Table 2）。第1主成分は、相手へのこちらからのかわりが共通性として見られるので積極的関与と名づけた。第2主成分は、異質な人への許容性を示すと考えられるので異質耐性と名づけた。それぞれの $\alpha$ 係数は、.83と.32で、第2主成分の信頼性が極端に低く、尺度として項目得点を合成することが不適切と考えられる。そこで、第2主成分については、項目ごとの得点を以後の分析では使用することにした。

葛藤後状況での受容反応尺度からは、固有値の減衰状

Table 2 受容状況での受容反応項目の主成分分析（バリマックス回転後）

項 目	I	II
＜積極的関与＞ $\alpha = .83$		
9. 新メンバーの参加を喜び、積極的に受け入れる	.77	.15
7. 相手の気持を考えて、色々と話しかける	.76	.01
8. 相手とじっくりとつき合っていこうとする	.75	.04
6. 積極的にこちらから相手のことを知ろうとする	.74	-.15
10. 積極的に集団の仕組みのことなどを教えてあげる	.67	.20
3. その人の色々な面を知ろうとする	.67	-.36
12. その人の馴染めるように他の人にも呼びかける	.54	.15
＜異質耐性＞ $\alpha = .32$		
4. どんな人かということをすぐに判断しようとする（*）	-.29	.73
5. 自分と考えが合わない人なら避けたいと思う（*）	.17	.58
2. その人が今までの集団メンバーと異質でも、当然として受け入れる	.31	.47
1. 今までの集団の中の人間関係が壊されないか心配する（*）	-.05	.28
11. 相手に露骨でない程度に気をつかう	.20	.24
2 乗和	3.71	1.47
寄与率	.31	.12

（\*）は逆転項目

Table 3 葛藤状況での受容反応項目の主成分分析 (バリマックス回転後)

項 目	I	II
〈関係継続〉 $\alpha = .86$		
16. 自分も反省する	.68	.21
17. 喧嘩に至った, 相手の側の事情も思いやる	.68	.19
3. 相手がどのような人かをよく理解しようとする	.68	.14
14. 自分にも非があると考え謝罪する	.66	.15
4. 相手が今どう思っているかを考える	.61	.11
2. 人それぞれ違うのは当たり前だと考え, 相手を許してやる	.61	.20
15. 相手の悪いところも許してやる	.58	.12
20. 何故腹が立ったのかをよく考える	.55	-.08
1. 相手の中で受け入れられるところは受け入れていこうとする	.55	.29
19. 翌日には許して, 普段通りに接する	.53	.14
12. 相手と自分とはつき合っては行けないのか, もう一度よく考える	.51	.04
21. 相手に悪いことをしたと思う	.50	.21
7. こちらから件直りをしようと声をかける	.48	.27
13. 相手の謝罪は気持ち良く受け入れる	.44	.05
18. 相手のどこが良くなかったかを説明する	.40	-.21
〈非拒絶〉 $\alpha = .84$		
6. 顔を見るのも嫌だと思う (*)	.13	.80
11. 相手のことなど考えたくもない (*)	.21	.77
5. 相手とはもうつき合っていけないと考える (*)	.05	.75
10. いつまでも相手を許せない (*)	.18	.75
9. 基本的に相手の方が悪いと思う (*)	.14	.71
8. 自分が正しい限りは相手を許せない (*)	.09	.65
2 乗 和	5.00	3.75
寄 与 率	.24	.18

(\*) は逆転項目

Table 4 集団構成の認知, あいまいさへの耐性の各群ごとの受容反応尺度平均値

集団構成の認知 群内被験者数	あいまいさへの耐性高群			あいまいさへの耐性低群		
	個人 21	小集団 44	大集団 51	個人 19	小集団 55	大集団 60
受容状況						
積極的関与c*	3.43	3.21	3.39	2.86	3.30	3.39
項目 1a**	3.95	4.32	4.37	3.42	4.25	4.18
項目 2	3.57	3.77	3.84	3.53	3.60	3.55
項目 4	2.90	3.20	3.16	3.11	3.02	3.08
項目 5a*	3.52	3.02	3.29	2.95	2.78	3.28
項目 11	3.67	3.59	3.53	3.32	3.58	3.67
葛藤後状況						
関係継続	3.46	3.27	3.36	3.18	3.32	3.40
非拒絶 a'	3.81	3.70	3.92	3.47	3.63	3.85

注) a は集団構成の認知の主効果, b はあいまいさへの耐性の主効果, c は両者の交互作用が存在することを示している。' は10%, \* は5%, \*\* は1%で有意であることを示す。

況と, 項目のまとまりの良さから2主成分を抽出した (Table 3)。第1主成分は, 自分の非を反省する, 相手の受け入れられるところは受け入れていくといった項目

からなり, 関係を継続させようとする努力を示すことを共通性としてあげられるので, 関係継続と名づけた。第2主成分は逆転項目が集まり, 拒絶の低さを示す項目群

なので非拒絶と名づけた。それぞれの $\alpha$ 係数は、.86と.84で信頼性は十分と判断した。2つの尺度間の相関係数は $r = .38$  ( $p < .001$ )だった。

#### 集団構成の認知×あいまいさへの耐性の分散分析

集団構成の認知（個人、小集団、大集団）、あいまいさへの耐性の高低を独立変数、受容反応の各尺度を従属変数とした2要因分散分析を行なった。各変数の記述統計量はTable 4のとおりである。

受容状況 受容状況での積極的関与尺度に、有意な交互作用がみられた ( $F(2, 244) = 3.15, p < .05$ )。下位検定の結果、個人カテゴリー化認知群の水準で、あいまいさへの耐性の単純主効果が有意であった ( $F(1, 244) = 5.25, p < .05$ )。集団を個人の集まりとみなしている場合、あいまいさへの耐性が高い人は低い人よりも、新参者への積極的関与が高いことが示された (Figure 1)。

受容状況のもう1つの主成分である異質耐性に関しては内的整合性が低かったので、項目ごとの分析を行なった。

項目1「今までの集団の中の間人間関係が壊されないか心配する（逆転項目）」では、集団構成の認知の主効果が有意だった ( $F(2, 244) = 5.74, p < .01$ )。そこで、有意確率を5%に設定したLSD検定による多重比較を行なった。なお、多重比較はこれ以後すべて有意確率5%のLSD検定を使用している。多重比較の結果、個人カテゴリー化認知群と小集団カテゴリー化認知群および大集団カテゴリー化認知群との間に有意差があった ( $MSe = 1.02, p < .05$ )。作業集団を、自分の集団に新参者が加わったと認知している群、そして同じ大学の人の集まりと認知している群より、個人の集まりと認知している群の方が、新参者の加入による既存の人間関係の崩壊を心配するという結果である (Figure 2)。

項目2「その人が今までのメンバーと異質でも、当然として受け入れる」にはいずれの効果も有意でなかった。

項目4「どんな人かということを手をすぐに判断しようとする（逆転項目）」にもいずれの効果も有意でなかった。

項目5「自分と考えが合わない人なら避けたいと思う（逆転項目）」では、集団構成認知の有意な主効果 ( $F(2, 243) = 3.47, p < .05$ ) がみられ、多重比較の結果小集団カテゴリー化認知と大集団カテゴリー化認知との間に有意差が検出されている ( $MSe = 1.27, p < .05$ )。小集団を意識している群は、大学カテゴリーを意識している群に比べて、自分と考えが合わない人なら避けたいと思うことが示された (Figure 3)。

項目11「相手に露骨でない程度に気を使う」ではいずれの有意な効果も得られなかった。

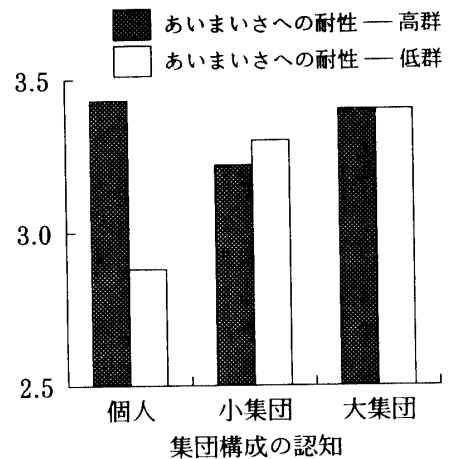


Figure 1 受容状況での積極的関与への集団構成の認知とあいまいさへの耐性の効果

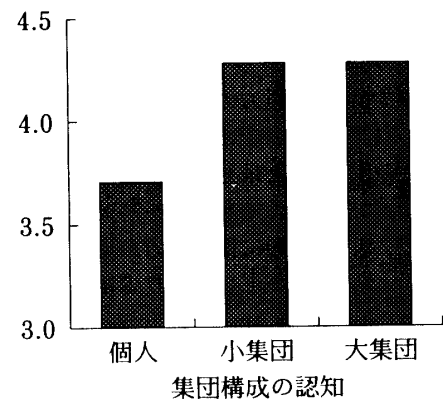


Figure 2 受容状況での項目1への集団構成の認知の効果

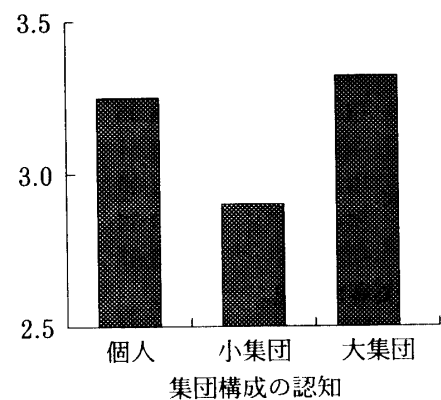


Figure 3 受容状況での項目5への集団構成の認知の効果

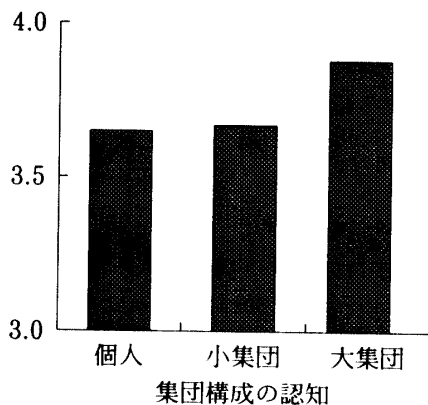


Figure 4 葛藤状況の非拒絶への集団構成の認知の効果

**葛藤後状況** 集団構成の認知、あいまいさへの耐性を独立変数、関係継続尺度を従属変数とした2要因分散分析を行なった。その結果、いずれの有意な効果も得られなかった。

同様に非拒絶に対しても分散分析を行なったところ、集団構成の認知に有意傾向の主効果がみられた ( $F(2, 244) = 2.41, p < .10$ )。多重比較の結果、小集団カテゴリー化認知群と大集団カテゴリー化認知群との間に有意差があった ( $MSe = .64, p < .05$ )。小集団でカテゴリー化している人よりも、大集団でカテゴリー化している人の方が、逸脱者への拒絶が低いことが明らかになった (Figure 4)。所属大学という共通のカテゴリーの意識化によって逸脱した新参者に対して、より受容的になるのであろう。

## 考 察

### 教示によるカテゴリー化操作

カテゴリー化を教示によって起こす操作は、本調査では無効であった。本調査の参考とした Gaertner et al. (1989) の研究では、実際の作業集団の再構成を通してカテゴリー化を操作している。このような実験の手續きに比べて、本研究での教示文によるカテゴリー化の操作は、集団成員性の顕著さに問題があったように考えられる。

Turner (1987) では、集団成員性の顕著さは、集団間比較が生じる場合や、集団間差異が明瞭である場合に高まると述べられている。本研究での教示文では、外集団との比較を意識させる部分がなかったことが、カテゴリー化を操作できなかった一因と推測される。

### 仮説の検討

受容状況の積極的関与では、個人カテゴリー化認知群

では、あいまいさへの耐性が高い人は、低い人よりも積極的関与が高くなることが分かった。これはカテゴリー化認知の効果が個人カテゴリー化認知群には影響しなかった結果と考えられる。しかし、同じくカテゴリー化認知の効果が小さいと予測していた小集団カテゴリー化認知群では、あいまいさへの耐性の効果はなく、大集団カテゴリー化認知群とほぼ同等な関与を行なっている。加えて、項目1「今までの集団の中の間人間関係が壊されないか心配する (逆転項目)」、項目5「自分と考え方が合わない人なら避けたいと思う (逆転項目)」では、カテゴリー化認知の効果は有意であるが、あいまいさへの耐性の効果は有意ではなかった。項目1では、個人カテゴリー化認知群よりも小集団、大集団カテゴリー化認知群の受容反応が高く、項目5では、小集団カテゴリー化認知群よりも大集団カテゴリー化認知群の受容反応が高い。これらから、個人、小集団カテゴリー化認知群ではあいまいさへの耐性が有意な効果を持つという仮説①は支持されなかった。大集団カテゴリー化認知群の受容反応が高いという部分のみが支持されている。

葛藤後状況では、関係継続では仮説②の小集団カテゴリー化認知群と大集団カテゴリー化認知群での差は見出されなかった。関係継続の個人カテゴリー化認知群でのあいまいさへの耐性による差は、有意ではないがあいまいさへの耐性が高い人が低い人よりも高いことが見て取れる (Table 4 参照)。非拒絶尺度に関しては、異質な逸脱者と葛藤をした後でも、大集団でのカテゴリー化認知が生じると、小集団でカテゴリー化認知するよりも拒否傾向が低い傾向にあることが分かった。これは、比較的明瞭なカテゴリー化認知と受容反応の関連を示している結果であろう。しかし、個人カテゴリー化認知群では、あいまいさへの耐性の効果はみられなかった。仮説②も部分的に支持されたにとどまった。

これらの結果は、仮説と異なる部分が大きいが、その第1の原因は、あいまいさへの耐性の効果が予測より小さかったことである。第2の原因は、小集団カテゴリー化認知群と大集団カテゴリー化認知群の間に差があまり生じなかったことである。

第1の点については、本研究では、集団へのカテゴリー化認知を被験者に尋ねたことで、カテゴリー化の効果が前面に出てきたことをその一因にあげられる。集団の一員としての自己を意識するとき、個人差変数の効果は低減し、集団の一員としてのカテゴリー化がより個人の行動に影響を持つと推測できる。積極的関与の結果や、有意ではないが関係継続の結果がそのような解釈にあてはまっている。我々が現実生活で、ただ1人の個人として行動することはむしろ稀であることを考えると、現実世

界での他者の受容に関しては個人差変数の効果はそれほど大きくないのかもしれない。

第2の点については、受容反応に種類があって、ある反応群以外は小集団-大集団カテゴリー化認知が問題にならないことに起因すると推論できる。本研究で考えられる受容反応は大まかには、受容と拒否に分けられる。本研究では、受容状況と葛藤後状況でそれぞれ2主成分が抽出された。それぞれの項目内容をみると、積極的関与と関係継続が受容にあたり、異質耐性と非拒絶が拒否にあたる。この観点から結果を眺めると、受容では個人-集団（小集団-大集団）で差が生じ、拒否では小集団-大集団で差が生じている傾向があることを見て取れる。我々の他者への受容的側面には個人-集団という軸が重要で、拒否的側面に関しては小集団-大集団、いいかえると内集団-外集団の軸が重要であることを示唆している。いずれにしろ、本研究では、集団への新参者の受容という状況では、予測ほど個人差変数が効果を持たず、むしろ個人-集団、あるいは小集団-大集団といった自己のカテゴリー化が大きな効果を持つことが示された。

### 本研究の問題点と今後の課題

本研究では、カテゴリー化の外的な操作を意図したが、今回の手続きでは無効であった。被験者の集団構成の認知と受容反応との関連の検討という形に研究が修正されたため、本研究の結果は基本的に共変関係の記述である。したがって、本研究で集団構成の認知と受容傾向に関連があることが分かっても、どちらが原因であるということはいえない。したがって今後は、本研究で確かめられた共変関係を、カテゴリー化の操作を使用した実験で確かめることが必要である。

本研究で使用した集団構成の認知は何によって決定されたのかは、調査結果からは分からないが、被験者自身の現在までの集団経験は1つの要因であろう。集団と継続的な相互作用を持ち、安心感を得ていれば集団を個人の集まりと認知することは少ないと考えられる。もしそうだとすれば、本研究の結果はこれまでの集団経験に影響を受けている可能性がある。したがって、今後は現在までの集団内活動と他者への受容との関連も検討する必要がある。

また、本研究において、あいまいさへの耐性の効果は、カテゴリー化の効果に比べて低い結果が得られている。異質な他者を受容する場合、自己をどの集団に関係づけているかという、自己カテゴリー化の効果が大きい

ことが分かった。集団成員としての自己認知の効果が、個人差変数の効果より大きいとすれば、今後は集団の中での自己という観点からの検討が必要であろう。

### 引用文献

- Billig, M., & Tajfel, H. 1973 Social categorization and similarity in intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 3, 27-52.
- Bunder, S. 1962 Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-50.
- Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance*. Row, Peterson and Company. (末永俊郎 監訳 1965 認知的不協和の理論：社会心理学序説 誠信書房)
- Gaertner, S. L., Mann, J., Dovidio, J. F., & Murrell, A. 1989 Reducing intergroup bias: The benefits of recategorization. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 239-249.
- Heider, F. 1958 *The Psychology of Interpersonal Relations*. John Wiley & Sons.
- 今川民雄 1981 Ambiguity Tolerance Scale の構成 (1) 北海道教育大学紀要 第1部C 教育科学編, 32, 79-93.
- Turner, C. J. 1987 *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Blackwell. (蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 訳 1995 社会集団の再発見：自己カテゴリー化理論 誠信書房)
- 植村善太郎 1997a 自集団への新規参入者に対する寛容な態度に関連する要因 日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 140-141.
- 植村善太郎 1997b 「寛容さ」と共感性の関連について 日本心理学会第61回大会発表論文集, 129.
- 浦光博 1997 正義の名の下への排斥—それはなぜ生じるのか、それをどう克服するのか— 日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 40-41.
- Webster, D., & Kruglanski, A. W. 1994 Individual differences in need for cognitive closure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 1049-1062.

(1999年9月16日 受稿)



ABSTRACT

The Effects of Ingroup-outgroup Categorization and Tolerance for Ambiguity on the Acceptance of Heterogeneous Newcomer.

UEMURA Zentarou

The purpose of this study is to investigate the effects of ingroup-outgroup categorization and tolerance for ambiguity on the acceptance of heterogeneous newcomer. The scores of acceptance were measured in the 2 situations by a questionnaire given to 256 undergraduates. First situation was that a newcomer joined the group (acceptance situation). Second situation was the heterogeneity of newcomer came to obvious (after conflict situation). The manipulation of categorization failed therefore the cognition of group constitution (individual, small group, large group) that was used as manipulation check and tolerance for ambiguity (Budner, 1962; Imagawa, 1981) were adopted as the independent variables. Two-way ANOVAs on the scores of acceptance showed that in case that individual categorization cognition occurred high tolerance for ambiguity group had more positive commitment with newcomer than low tolerance for ambiguity group in acceptance situation. In after conflict situation large group categorization group made a lower reject than small group categorization group. This results suggested that ingroup-outgroup categorization related with the acceptance of heterogeneous newcomer.

Key Words: ingroup-outgroup categorization, the acceptance of heterogeneous newcomer, tolerance for ambiguity